

オリンピック・
 パラリンピック
こども新聞

2021年(令和3年)
 12月25日 第12号

各面の内容

2,3,4,5
こども記者のイチ押し選手
 母校の文京一中を訪れたウルフ・アロン選手

オリンピック・パラリンピックこども新聞は、こどもたちが記者になって取材や写真撮影に取り組み、みなさまにおどける新聞です。

歩けなくても前向き
 イリアナ・ロドリゲスさんは、パラリンピック難民選手団の団長をつとめています。「笑顔がすてきな」という印象を持ちました。イリアナさんは歩けなくなったときは、「自分の人生はどうなってしまうんだろう」と不安になったそうです。でも、「また生活できる。泳げる」と分かったら、前向きになれたそうです。イリアナさんの言葉から、「難民選手団のみなさんは、世界の難民に希望の光を届けたいと思っているんだろうな」と、深く感じました。
 (小4/ちさと)

ポジティブに考え
 イリアナ・ロドリゲス団長に気分てんかんに何をするか質問しました。ポジティブなことを考えるだけで気分てんかんできるそうです。ぼくは本を読んだりして気分てんかんします。
 (小4/稲葉有展)

パラリンピック難民選手団と交流

9月3日、オンラインでパラリンピック難民選手団との交流会に参加し、イリアナ・ロドリゲス団長に話を聞きました。
 (関連記事6面)

戦争などで国に住めなくなった難民は、世界に8000万人もいて、9年前から2倍になったそうです。難民で、障害があるのにスポーツをがんばって、パラリンピックに出た人たちが

励まし合って
 いることも知りました。元の国や言葉、習慣など、違う人たちで、金メダルをとっても、流れる国歌はありません。難民キャンプでは、言葉や習慣が違う人たちが親しくなれるようにスポーツに取り組んでいます。難民選手団の選手も、お互い励まし合っていたそうです。僕たちも、国などが違って助け合えたら良いと思いました。
 (小4/大堀立真)

心に残ったことは、難民選手団がパラリンピックに出場するのは、今大会で2回目だということです。リオ大会で初めて結成され、東京大会では6人が出場しました。難民選手団からは「努力」という言葉をよく聞きました。難民で障害があるのに、パラリン

努力は裏切らない
 ピックに出るのはものすごいことです。その裏では、人一倍努力していると思います。選手のみなさんはみんなに希望や勇気を伝えたいそうです。僕には伝わってきませんでした。決して努力は裏切らないと思いました。
 (小4/垣本律紀)

二つの意味 戦う
 難民の中で、受け入れてくれた国で自分の力を生かして活躍している人もいます。とても印象に残りました。難民の人々について詳しく知ることができ、協力したいと思いました。難民選手団は二つの意味で戦っているのだと思います。
 (小5/根本梨咲)

夢舞台 困難と戦う
 シリアやアフガニスタンでは100人に1人が難民だそうです。難民選手の皆さんは夢の舞台で困難に立ち向かう姿を通して、祖国に希望と勇気を与える存在になれば、と思っています。
 (小5/豊島悠太)

8月23日の記者会見に出席した難民選手団の4人は、文京区の小学生が折った青い紙ひこうきなどに喜んでいました。右からアリア・イッサ選手、中央奥シャハラッド・ナザジール選手、中央手前イリアナ・ロドリゲス団長、左イブラヒム・フセイン選手
 ©アフロススポーツ



苦しみわかった
 パラリンピックの難民選手は、オリンピック選手やパラリンピック選手とは違う努力もしていることを知りました。難民選手のような困難のない僕が幸せな環境にいることに気が付きました。だから今後は、できる限りの努力をし、いろいろなことを乗り越えていきたいです。また今回の取材で、難民選手のことを知り、難民の人の苦しみや大変さが分かりました。これからは、僕も難民選手のお手伝いが、少しでもできればいいなと思いました。
 (小6/タクト)



東京2020大会「イチ押し」

東京2020大会はオリンピック、パラリンピックともに無観客で行われた。現地での観戦はかなわなかったが、こども記者はテレビなどを通して自国・地元での大会に触れた。日本選手団は活躍し、多くのメダル

を獲得したが、それだけではなく、努力や友情、チームの和など沢山の記憶を残した。こども記者がそれぞれの「イチ押し」をまとめた。(クレジット表示がない写真については、毎日新聞社提供)

挑む姿 感動



柔道男子100kg級決勝、韓国の趙グハム選手を破り金メダルに輝いたウルフ・アロン選手(左)



フェンシング男子エペ団体決勝で優勝を決めて喜ぶ(手前左から)見延和靖、山田優、宇山賢、加納虹輝の各選手



卓球混合ダブルスで中国ペアとの決勝を制した伊藤美誠選手(手前)と水谷隼選手

卓球

58歳、年齢関係なく

ルクセンブルクのニー・シャリーエン選手(58)は、オリンピックの卓球史上最年長です。女子シングルス2回戦で敗れました。

た。韓国のシン・ユビン選手(17)とは41歳の年齢差でしたが接戦でした。年齢に関係なく頑張る素晴らしい選手だと思いました。(小4/大堀立真)

小さなボールを速く

1番すごいと思ったのは、日本の卓球選手です。卓球のボールはとても小さくて速くてあてにくいのに、さらに速くボールを難しいところへ返し、しかもみんなメダルを取ったからです。(小4/KOUKI)

ラリーで勝負する

石川佳純選手は、女子団体では主将、選手団では副主将を務めています。サーブが得意で、ラリーで勝負するプレースタイルです。(小5/林莉央)

あきらめず大逆転

混合ダブルスの準々決勝、ドイツ戦でマッチポイントを握られた水谷隼・伊藤美誠両選手の頭の中には、あきらめないという一言があったと聞きました。2人の気持ちから生まれた大逆転に、感動しました。(小6/水上清佳)

フェンシング

世界1位を破って

フェンシング男子エペ団体で日本は準々決勝で世界ランキング1位のフランスを破って勝ち上がり、日本初の金メダルを獲得しました。エペは世界的にはフェンシングの中で最も人気が高く、競技人口も多いですが、



スポーツクライミング女子複合決勝で、同じ組になって登る野口啓代選手(手前)と野中生萌選手(区立千石保・林町小出身)

スポーツクライミング

猛スピードで登って

今回初めて選ばれた競技です。スピード種目で選手たちは赤色のホールドを信じられないスピードで登っていました。(小4/渡邊葵)

引退試合で銅メダル

女子複合で、32歳の野口啓代選手が銅メダルを獲得しました。特に、最終種目のリードで高く登り、TOPまで行く勢いでした。今回が引退試合だった野口選手はインタビューで、「野中選手とメダルを獲得できてうれしく」と話していました。(小4/中澤琉璃)

柔道

意外な料理人

ウルフ・アロン選手は100kg級の柔道家です。見た目と名前は怖そうだけど、実は料理人 YouTuberです。カンパチ1匹まるごとを、きれいにさばき、見事に盛り付ける姿は意外でしかありません。こんなにエプロンが似合い、金銀2個もメダルをもつ柔道家はいませ

21年ぶりの快挙

100kg級のウルフ・アロン選手は文京区第一中学校出身です。私は金メダルを取る瞬間をテレビで観戦し、100kg級のメダルは21年ぶりということを知り驚きました。混合団体では難民選手団が出場。嘉納治五郎が築いた柔道は今でも世界中で親しまれているスポーツだと感じました。(小6/田中杏依)

スケートボード女子パークで優勝した
四十住さくら選手



(小6/水上清佳)

若い力が躍動しました。日本人選手の活躍も素晴らしかったですが、何より、国籍関係なく選手同士で健闘をたたえあう姿がとても爽やかでした。

健闘たたえ合い

(小5/細貝波瑠)

今大会初採用のスケートボードで四十住さくら選手が金メダルをとることができたのは、地元の人が無償で提供してくれた練習場、通称「さくらパーク」のおかげでした。

地元の人が協力

(小5/豊島悠太)

新競技として行われたスケートボードの女子ストリート。日本史上最年少の13歳で金メダルを獲得した西矢栞選手は普段の努力の結果が金メダルにつながりすぎていると思いました。

最年少13歳で金

スケートボード

若い力 躍動



⑤空手男子形で優勝した喜友名諒選手の決勝の演武

⑥快進撃を見せたバスケットボール女子日本代表

©アフロスポーツ

オリンピックピック編



男子高飛び込みで14歳で7位になった
玉井陸斗選手

飛び込み

21年ぶりの入賞

私が尊敬するのは男子の玉井陸斗選手です。14歳で7位でした。入賞は21年ぶりです。私よりも年下ですが、オリンピックで活躍するのはすごいと思いました。(中3/Raino)

努力の成果披露

男女各4種目が行われた飛び込みの男子10歳高飛び込みで7位入賞した玉井陸斗選手。日本選手団男子最年少の14歳で努力した成果を出しすぎていると思いました。次の大会も頑張ってください。(小5/豊島悠太)

総合馬術の戸本一真選手は、個人種目で西竹一選手(パロン西)以来89年ぶり入賞しました。2種目を終えて5位につけ最終の障害では棒を一本落としただけでゴールし、6人でのメダル決定戦(ジャンプオフ)でもノーマリスでの騎乗で4位でした。(小6/加藤三可里)

総合馬術

ノーマリスで89年ぶり

で初の金メダリストです。空手は沖縄古来の武術が中国の武術と融合して誕生しました。私も空手をしていました。テレビで見ている体から立ち上る湯気、表情、気合い、道着が擦れる音は、卓越した素晴らしさがあり、圧巻でした。今回だけのオリンピック競技ですが、この素晴らしい勇姿に、世界中の人

喜友名諒選手は沖縄県出身者

素晴らしさ卓越

空手

あきらめず逆転

最も心に残ったのは向田真優選手です。決勝前半は中国人選手に0対4で負けていましたが、後半の3分間で5点を取って逆転し、金メダルを獲得しました。追い込まれても最後まであきらめずに挑戦し続ける向田選手の姿勢に、僕は心が動きま

南スーダン出身で、難民選手団のジェームズ・ニャン・チェンシエク選手は陸上男子8000mの1周目で転倒しましたが、最後まで走り抜きました。レース後は涙していましたが、私は諦めず最後まで走り抜いたその姿にとっても感動しました。(中1/馬場和花奈)



バスケットボール女子

体格差関係なく

銀メダルを取った日本女子バスケットボールチームの平均身長は出場12チーム中11番目でしたが、3ポイントシュートの成功率はトップでした。一生懸命練習して体格差を乗り越えた事がすごいと思いました。

(小4/芹川莉那)

前例のない準優勝

私が最も素晴らしいと思ったチームは女子バスケのチームです。平均身長が出場12カ国の中で2番目に低く、前例のない中、準優勝まで駆け上がり輝かしい功績を残してすごいと思いました。(中3/大迫環)

レスリング

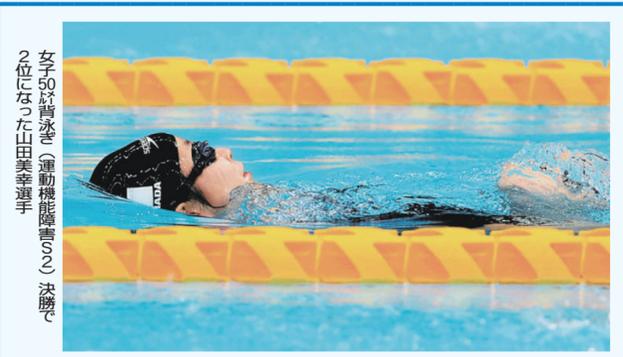
々が興味を持ち、未来のライバルがどんどん増えることを心から願ってやみません。(高1/今津知萌世)

陸上

(小6/大迫輝)

転倒しても最後まで

こども記者が選んだ「イチ押し」 東京2020大会の選手たち



女子50歳青泳(運動機能障害S2)決勝
2位になった山田美幸選手

水泳と進学を両立

日本パラリンピック史上最年少のメダリストとなった競泳の山田美幸選手がひたむきに泳ぐ姿は、テレビで見ている私たちにたくさんの勇気を与えてくれました。インタビューで、競技と進学の両立を頑張りたいと話していました。中学3年生で受験を控えるアスリートでもある山田選手の努力は、並大抵ではないだろうと尊敬の気持ちでいっぱいになりました。(小6/水上清佳)

細かい所にも注意

競泳の鈴木孝幸選手は他の選手がフライングをしたのを見てコールから号砲までの時間がいつもより少し長いことを確認しました。このような細かいところにも目をむけ、両手足に障害があることを乗り越え、金メダルを獲得しました。(小4/芹川莉那)

水のプリンセス

競泳の一ノ瀬メイ選手は、先天性右前腕欠損症のため、生まれつき右腕が人より短いのですが、1歳半で水泳を始めました。障害を理由に地元のスイミングスクールへの入会を断られましたが、小学2年生のとき、近畿障害者水泳選手権大会で2種目に出場し、1位になりました。東京2020大会には出られませんでした。が、力強い意志を泳ぎで伝えることから、愛称は「水のプリンセス」です。(小5/林莉央)

夢に向かう姿に感動

東京2020パラリンピックに出場した選手の中で私は山田美幸選手に着目しました。山田選手は生まれたときから両腕がなく、両脚にも障害があります。彼女がわたしと同じ14歳だということに驚きました。同い年なのに夢を持ってそれに向かって進んでいく姿にはとても感動しました。(中3/大迫瑠)

パラリンピック編

いつも全力プレー



決勝進出を決め、宮島徹也選手と抱き合っている香西宏昭選手(右)

車いすバスケットボールの日本の試合は、すごくおもしろかったです。決勝戦ではアメリカに4点差に迫りました。コート上の5人全員がいつも全力でプレーし、素早い動きを続けて、やる気いっぱいのバスケでした。香西宏昭選手はよく3点シュートを決めていました。日本人のゆいゆいのプロ選手です。鳥海連志選手はいつも素早く、ずっとコート中を動き回り、ピンチの時もいろいろなことをやる、すごい人です。(小4/大堀立真)



第3ピリオド、豪州のライリー・パット選手(右)をブロックする倉橋香衣選手(左)

車いすラグビー倉橋選手「自分のプレーやりきった」

車いすラグビー銅メダリストの倉橋香衣選手にオンラインで単独インタビューしました。初めて出場したパラリンピックでは「自分たちのプレーをやりきった。(自身は)最後のオーストラリア戦では体格の大きなライリー・パット選手にうまい具合にぶつかりました」と話しました。心がけていることをたずねると「障害が重く

てスピードが遅いので、次に何が起るかを常に考え、先読みしているようにしています。先読みをして、決めたら迷わずに実行することを大切にしています」と答えてくれました。倉橋選手は、決めたら迷わずに突進する人だと感じました。(小4/垣本律紀)



倉橋選手(左)にオンラインでインタビューした垣本律紀記者(右)＝本人提供

いつでも前向き

大阪府出身のアーチェリー代表、岡崎愛子選手は、2005年4月のJ.R.福知山線脱線事故で頸髄を損傷し、今でも首から下がまひした状態です。事故が起きた後も、「家族に頼らず生きたい」「事故にあった過去を見てほしくない」と思い、いつでも前向きに生活したそうです。競技を始めて5年ですが、コロナ禍の中でも諦めずに自宅でトレーニングをしていたそうです。(小6/大迫瑠)



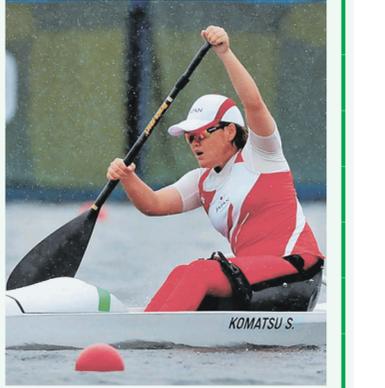
アーチェリー女子準々決勝で矢を放つ岡崎愛子選手

カヌー新種目 タイム伸ばし

カヌーの新種目パーに小松沙季選手が初出場しました。小松選手はバレーボールの選手でしたが、おとし6月に体調をくずし、両足と左手にまひが残りました。準決勝では4着でしたが、予選よりもタイムを6秒近く縮めました。(小4/加藤大和)

ボート競技3カ月でチームに

都立文京盲学校に通学する高校3年の木村由選手について調べました。ボート競技を始めてからわずか3カ月余で混合かじ付きフォアの日本チームに入りました。小学校も文京区の小学校に通学していました。木村選手は国際オリンピック委員会にオリンピック・パラリンピックを東京で開催してほしいと手紙を書いていたそうです。(小6/田中杏依)



女子パーシングル予選で力強くパドルをこぐ小松沙季選手

けがや自分の弱さに負けず金メダル

車いすテニスは一般と同じコートの広さ、ネットの高さで行われますが、2回バウンドしたボールを返すことができます。打つ時に車いすからお尻を浮かせることは禁止です。シングルスで金メダルを獲得した国枝慎吾選手は9歳の時に病気で車いす生活になり、小学6年生の時に車いすテニスを始めました。けがや自分の弱さに負けず金メダルを獲得してすごいと思いました。(小4/豊島悠太)



男子シングルスで優勝した国枝慎吾選手

スキーから転身

新種目のパラテコンドーの太田渉子選手は冬季パラリンピックでノルディックスキーの選手として3回出場し、好成績を残し引退しました。引退後、習い事としてパラテコンドーを始め、2019年の世界選手権で3位に入りました。パラリンピックでは、金メダルを取った選手に準々決勝で負け、敗者復活戦では2回戦で負けました。(小6/加藤三可里)



女子5kg級敗者復活戦でオーストラリアのシャリン・ワトソン選手(左)と戦った太田渉子選手

新しい友達できた

こん棒投げは握力が足りず、かかげで自信が付き、新しい友達や投げや円盤投げなどに参加もできた。私のような障害を持てない選手のために考えられた子どももかいて、家の中に閉じ込めておかないでスポーツ選手に準々決勝で負け、敗者復活戦では2回戦で負けました。(中1/馬場和花)

難民選手団初の女性 アリア・イッサ選手

1人6回、こん棒投げの世界記録を1分50秒近く更新し、金メダルを獲得した。選手たちが投げた。文京区にある都立立正高等学校の木工部員が製作したものだ。(小5/ゆき)



陸上女子こん棒投げ(座位F32)、難民選手団アリア・イッサ選手の投てき

悪条件で8分18秒

マルクス・レーム選手は走り幅跳びの義足クラスで、8分18秒を自己最高記録とする選手です。オリンピック選手に匹敵しますが、義足が「ドレーピング」になるため、オリンピックへの出場は認められませんでした。今大会では雨で地面がすべる中、8分18秒を記録しました。レーム選手は「そのかげにある努力を見てほしい」と言っています。いつか、オリンピックでメダルを取るレーム選手を見たいです。(小4/ちさと)

健常者より良い記録

ドイツ陸上男子のマルクス・レーム選手はドイツ陸上選手権で健常者を抑えてドイツ王者となりました。今年のパラリンピックでは大差をつけて陸上男子走り幅跳びで3連覇という結果を残しました。私は義足を使いながらも健常

走り幅跳びで金メダル3連覇を獲得したマルクス・レーム選手



走り幅跳びで金メダル3連覇を獲得したマルクス・レーム選手 ©アフロスポーツ

限界自分で決める

マルクス・レーム選手は14歳の時にウエークボードの事故で、右足のひざ下を切断しました。走り幅跳びは利き足である右の義足で踏み切ったところ記録が伸びました。今大会は金メダル3連覇を果たしましたが、オリンピック金メダルの記録8分41秒は超えられませんでした。心に響いた彼の言葉は「自分の限界は自分で決める」です。選手たちの努力に、私たちは「限界は自分で決める」ことを思い出し、感動するのだと思います。(小4/浅岡蓮)

難民選手団初の女性 アリア・イッサ選手

1人6回、こん棒投げの世界記録を1分50秒近く更新し、金メダルを獲得した。選手たちが投げた。文京区にある都立立正高等学校の木工部員が製作したものだ。(小5/ゆき)



陸上女子こん棒投げ(座位F32)、難民選手団アリア・イッサ選手の投てき

難民、障害 それでも前へ



＝Getty Images/Christian Petersen

練習に励むパラ陸上のシャハラッド・ナサジプール選手

難民選手団の一員で円盤投げのシャハラッド・ナサジプール選手に8月23日、オンラインでインタビューしました。アスリートを目指したきっかけは2008年のパラリンピックです。夢を持つこと、自分の道を進むことが大事だと強調していました。(中3/大迫環)



シャハラッド選手にオンラインで取材したこども記者

パラ陸上円盤投げ シャハラッド・ナサジプール選手 インタビュー

日本にまた来たい

シャハラッド選手は円盤投げに出場しました。日本に来た印象を聞くと「大好きでぜひまた来たい」と話しました。

(小5/根本梨咲)

同じ難民に希望

英語でのインタビューは思っていた以上にドキドキしました。シャハラッド選手の「自分と同じ難民に希望をあたたかい」という言葉に感動しました。

(小4/東忠慶)

チャンス探して

アメリカに逃れた時に、どう

したらパラリンピックに出られるかを考え、いろいろな所に連絡を取ってチャンスを探したからシャハラッド選手は難民選手団に入りました。

(小4/中澤琉璃)

平和へ強い思い

2008年からパラ競技である投てきの練習を始め、15年にアメリカへ亡命した後、16年のリオデジャネイロ大会に参加しました。「平和」について「全ての人が手に入れられ、アクセスできる。そういうものでなければいけないし、そうであってほしい」と話していました。

(中2/久保壮太郎)

初出場一番幸せ

イランで脳性まひを持って生まれ、今はアメリカに住んでいます。初めてパラリンピックに出た時が一番うれしく、幸せだったそうです。難民であり、障害を持ちながらも、世界でかつやくしてとてもすごいと思いました。

(小5/本間柚葉)

決してあきらめない

「モットー」は「決してあきらめない」です。何を言われても、前に進みたいという前向きな心を見習いたいです。

(小5/小澤一葉)

夢を持って自分の道を進む

新しい人々に会えること

「2020大会の素晴らしさ」は「新しい人々に会えること」というシャハラッド選手が多くの新しい人々と出会い、友達になることを願います。I hope he can meet many people and make friends. (小4/KOUKI)

諦めず前を向き続けること

国を離れる時に勇気づけてくれたのは「諦めず前を向き続けること」 “Look forward and don't give up!” です。日本の人々が大好きなのでパラリンピック後も日本に来たいそうです。(小5/田中沙英)

スポーツは生きる力を与える

シャハラッド選手は難民選手団入りをとっても光栄だと思っています。「スポーツは目標を達成するためにとても役立った」と言っていました。スポーツは人に「生きる力」を与えるのだと、強く感じました。(小4/ちさと)

アスリートの夢舞台

難民選手団に選ばれた時、シャハラッド選手はうれしかったし幸せだったそうです。アスリートにとってオリンピック、パラリンピックは夢の舞台だと感じました。(小6/田中杏依)

戦争と平和 サトちゃんから学ぶ

文京区と国連UNHCR協会による小学生向けワークショップ「サトちゃん」の大切なもので、難民について学びました。

ワークショップでアニメ観賞

増え続ける難民の子ども

「サトちゃん」の大切なものは3本のアニメです。仲間と一緒に楽しそうにサトちゃんの住む街で戦争が起き、サトちゃんは米粒の涙を流します。その後、街に国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の方が来て安心して暮らせるようになりま。世界の難民の数は日本に住む人の半分以上です。難民の子どもが増え続けているそうです。

(小6/田中杏依)

平和な世界になってほしい

サトちゃんのアニメを見て戦争のつらさを学びました。普段、おながすいたらいつでも食べ物を買え、のどがかわいたら水道の水が飲め、家族が兵隊にとられることもありません。けれどサトちゃんの周りは違います。サトちゃんのような子がいらない平和な世界になってほしいと思いました。

(小5/細貝波瑠)

難民を支援、数減らしたい

ユニセフ募金は知っていましたが、UNHCRがどのように難民の人たちを支援しているかは初めて知りました。僕も難民の人たちを支援して、数を減らしたいと思いました。(小4/稲葉有展)

大切な人や場所うばわれ

わたしは「なん民」という言葉を知って、こわくなりました。それは、その人にとって大切な人や場所や思い出がうばわれること、そのものどと思うからです。アニメをみて、身近な人がどんなになくなったらと想像し、世界のどこかで本当にあるんだと思ってなみだが出ました。少しでも「なん民」の人たちを助けたいと心から思いました。(小4/羽那)

野球を明るく楽しく

アテネ大会で監督代行
中畑清さん

コロナ禍のため無観客で7月17日に行われたトークショー「中畑清氏のアテネ五輪話」で、中畑氏取材しました。当日の様子は文京区民チャンネル等で放送されました。

長嶋さんに憧れ

中畑清さんは、子どもの時に長嶋茂雄さんに憧れて、野球選手になりました。昔、野球はオリンピックの種目ではありませんでした。(出場したアテネオリンピック)

中畑清さんは、子どもがいても次があるので楽しかったです。でも、現役時代に死にそうなくらい練習したので、もうその環境に戻りたいとは思っていません。(小4/黄智宏)



中畑清さんと記念撮影するこども記者

金メダルへの期待高く

中畑清さんはとても明るく、楽しい人です。アテネオリンピックで長嶋ジャパンの監督代行を務めました。当時のジャパンは金メダルを取れる、とファンからの期待が高く、いい体験が

きたと話していました。野球はチーム競技なので、人間性が大切です。監督時代はコミュニケーションを取ることが第一にしていました。試合以外でも話す言葉が違う国籍の人とのコミュニケーションが必要で、苦労したのではと思います。(小5/根本梨咲)

でいきたいです。(小6/山下楓莉)

五輪とプロの違い

中畑清さんは「とても背が高い」と思いました。特に面白かった話は、オリンピックとプロ野球の違いです。オリンピックは、負けたら終わりなのに対して、プロ野球は負けてもまた次にチャンスがあり、楽しくて仕方なかったそうです。オリンピックのプレッシャーの中で戦うプロ野球選手を応援したいと思いました。(小5/数田麻華)

投手の頑張りが大事

中畑清さんはオリンピックの野球チームについて「特に投手が頑張らないとなかなか勝ち試合を作れない。点を与えないための守りの中心が投手。投手の中にも先発、中つぎ、おさえと役割分担がちゃんとある。注目の山本由伸投手をどう使って勝ち試合を作っていくか期待している」。ほくも各国の投手の使い方に注目して野球を観戦したいです。(小5/小濱智)

スポーツ半分以上

中畑清さんは「オリンピックに野球は必要! まだ野球は世界で半分くらいしか浸透していない。続けていけない」と教えてくれました。それにはたくさんの人の努力が不可欠だと感じました。また野球では「年代によるコミュニケーションの取り方の違いを知る努力をする」ことを心掛けています。「子どもたちには勉強半分、スポーツ半分以上になって欲しい」という想いを、私もつない

世界の人に伝えたい

作ってくれておどろき、とても感動しました。

中畑さんはカレライスやライオンを試合前に食べると、とても元気が出るそうです。長嶋茂雄選手にあこがれて野球を始め、今は、野球を世界の人に伝えたいと考えています。2004年のアテネオリンピックでは「長嶋ジャパン」の監督代行として、銅メダルをとりました。

友達と同じ経験を

元プロ野球選手の中畑清さんにインタビューしました。初めてプロ野球選手に会ったのでちょっとドキドキしました。プロ野球選手になった理由は、友達をたくさん作って同じ

チームではしんげんに思いつきケンカをして、本気でゴメンね、と謝れる気持ちになってから仲直りし友達になるそうです。中畑さんはほくたちに歌も

野球殿堂博物館を見学

209人が殿堂入り

野球殿堂博物館は、1959年に、後楽園球場の横にできました。最初は、「野球体育博物館」だったそうです。野球殿堂入りした209人のレリーフは、殿堂ホールにかざられています。野球の発展にたずさわった人がこんなにいるんだと感動しました。

(小5/小澤一葉)

一番高価なものは

この博物館で一番値段が高いものについて、学芸員さんは「アメリカと日本では高く売れるものは違い、アメリカでは昔のヤンキースの選手のユニホームが一番高いと聞いたことがある」と言いました。でも、みんなの宝物なので、今まで売ったことはないそうです。(小4/押田權)

投手交代は車に乗り

後楽園球場から東京ドームになって、プロ野球の試合では使われなくなったものがあります。リリーフカーと呼ばれる小さな車で、投手交代のときに、次の投手がこの車に乗り、ピッチャーマウンドまで運ばれていました。ブルペンがベンチに近くなった今は使われていません。

(小5/福島真人)

代表ユニホームも

学芸員のせきぐちたかひろさんの説明では、展示品を集めるのには許可が必要だそうです。サムライジャパンのユニホームもありました。戦争で亡くなったプロ野球選手の名前を見て「戦争は嫌いだ」と思いました。(小4/AO1)

野球博物館で取材するこども記者たち



三振取って気持ちいい

少年野球チームに入っている僕が興味を持ったのは、ピッチャーの役割の歴史です。ピッチャーは昔は、ゆるくて打ちやすい球を、打ってもらう役割でした。それではつまらないため、打ち取る役割になったそうです。僕は打ち取る仕事がいいです。三振を取るのが気持ちいいからです。(小5/松田隆之介)

変わっていくグラブ

道具の展示の中で、グラブの変化が面白いと思いました。元々は、素手でボールを取っていたそうです。最初のグラブは衝撃をあまり弱められない鍋つかみのような形でキャッチすると痛そうです。親指と人差し指の間の大きな網がありません。今は、頭上や足元のボールも取れるように、グラブの指は手の指より長くなっています。(小5/木村夏央)

頑張る姿が浮かぶ

野球殿堂博物館にはプロ、大学、高校、女子など日本の野球に関係する物が展示されています。今年の東京オリンピック日本代表に関する物も展示されていました。実際のユニホームや靴などを見ると頑張っていた姿が見えるような気がしました。新しい物を飾ることができる博物館だというのが印象的でした。

(小5/田中沙英)

Bリーグ「アルバルク東京」 田中大貴選手

感謝の思い

忘れない

Bリーグに所属するプロバスケットボールチーム「アルバルク東京」に所属し、東京オリンピックでキャプテンを務めた田中大貴選手に、こども記者の質問に対するビデオレターをいただきました。社は文京区にあります。

自信を持ってプレー

家族でアルバルク東京のファンなので、田中大貴選手が

質問に答えてくれてうれしかったです。私もミニバスケットボールをやっていますが、練習試合でも緊張してしまうことが多いので、田中選手の緊張のほぐし方は参考にになりました。自信を持ってプレーするために、まずは練習を頑張ってお力をつけていきたいです。(小5/林莉央)

オンとオフ切り替え

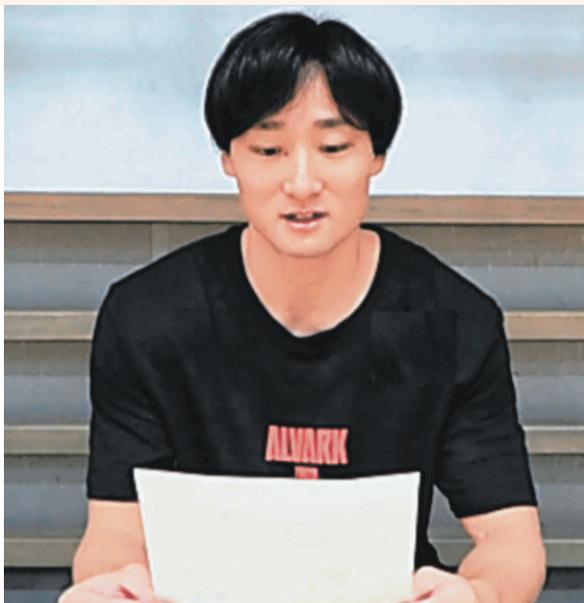
オリンピックにも出た、実力のあるすごい選手が、普段はどうやって息抜きをしているのか質問すると、「オンと

オフの切り替えが大事」「時間のある時などは温泉などに行く」と答えてくれました。私も温泉が好きなので、やっぱり温泉にいくとリフレッシュできるんだな、と思いました。オンとオフの切り替えが集中力につながっていると感じたので私も参考にしたいと思います。

(中1/馬場和花奈)

家族や先生、仲間へ

田中大貴選手の座右の銘は「ありがとう」です。「好きなバスケットボールをやれるのは家族や今まで指導してくださった先生、チームメイトのおかげで自分一人の力ではなく、このような人たちの力があってこそ今の自分があるからです」と話していました。日ごろから感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいと思いました。(小6/田中杏依)



こども記者の質問に答える田中大貴選手(左)東京大会には男子バスケットボールチームの主将として出場した田中選手 ©アルバルク東京

スポーツを「楽しむ」

ドイツ文化講座

子ども記者は10月30日、波多腰克晃さんのドイツ文化講座取材しました。

「地域愛」が支え

主に東京オリンピック開催までの流れやドイツ国民とスポーツのつながりについての話だった。オリンピック招致活動にはたくさんの方が関わり、貢献したことを知った。ドイツに市民自身がスポーツを支えるという考え方が根付いているのは「地域愛」だそうだ。(中3/大迫環)

チームの一員

波多腰先生は、ドイツのスポーツへの関わり方について紹介してくれました。ドイツでは住んでいる地域のクラブチームを応援し、自分はチームの一員と考えるそうです。運営にはお金がかかるため、企業からの支援を50:1というルール

を受けて、自分たちで物事を決められるようにしています。(小5/ゆき)

町の人たち一丸

ドイツではスポーツを「お金のため」ではなく、「楽しむため」に行っていることを知りました。日本では企業が中心となりスポーツクラブを運営していることが多いですが、ドイツでは、町の人々が中心となって運営しているのです。日本もドイツのように町の人たちが一丸となりチームを支えていく制度を導入した方が良いと感じました。(小6/大迫輝)

自分ができていること

ドイツでスポーツ観戦が人気なのは、地元愛・地域愛が強いからだそうです。講義で紹介されたジョン・F・ケネディの米大統領就任演説での言葉「祖国が君に何をしてくれるかと問う

な、祖国に君が何をなしえるかと問え」を聞き、所属する学校やチーム、地域、国のために自分は何ができるのかを考えていこうと思いました。(小5/大場皓翔)

サッカーと馬術

東京オリンピックは当たり前に関ざりされたと思っていました。でも、2016年のオリンピックでは落選して、再挑戦でつかんだものでした。ドイツではサッカーと馬術が人気で、野球は人気がないそうです。運動会も日本のような楽しいイベントではなく、全国

実話が映画に

ドイツで生まれたスポーツはありません。サッカーが人気なのは、それまで規則的な体操みたいな運動をやらされていたところにイギリスからサッカーが伝わり、とても楽しいスポーツだと知ったからです。「コッホ先生と僕らの革命」という実話の映画になっているということなんです。今度、見てみたいです。(小4/松本龍聖)

義足のジャンパー

義足のジャンパーと呼ばれるドイツのマルクス・レーム選手の話が心に残りました。今年8月22日、自身の世界記録を更新したそうです。学校の体育の授業で、馬術や自転車競技があるそうで、校庭がとても広いのではないかと想像しました。ドイツのスポーツについてもっと調べたいです。(小5/松本匠平)

編集後記

文京区はさまざまな形で東京2020大会と関わりました。「文京区オリンピック・パラリンピックこども新聞」は、2017(平成29)年10月の創刊以来、70を超える取材先に取材を行いました。

こども新聞記者ならではの質問には新たな気付きや発見があり、その思いを大切にしながら、こども記者や編集サポーターの皆さんと一緒にこども新聞を作成してきました。

今回が最終号となりますが、取材での学びが、こどもたちのレガシー

レーム選手にパラリンピックのマスコットを提供した成沢広修区長(左)
—©長田洋平/アフロスポーツ



となることを願っています。最後まで読んでいただきありがとうございます。